

こんばんは。

A T T A C 関西グループの喜多幡です。

発言の機会をいただき、ありがとうございます。今日は来年の G 7 がテーマですが、本題に入る前に、私が住んでいる大阪のことを話しておく必要があると感じています。

ご存じのように大阪では 10 年以上にわたって大阪維新の会に支持される府知事と市長の下で、「既得権益層」との闘いや「二重行政の無駄の一掃」という名目で、福祉や公共サービスが切り捨てられ、住民が分断され、大阪の文化やそれを支えてきた中小企業や小さな商店がないがしろにされてきました。維新と癒着した吉本興業には、やさしさに溢れた大阪の笑いはなく、空虚で強迫的な笑いしかありません。

思いつきの教育行政で教職員は疲弊していること、公立の医療機関や保健所の統廃合の結果、コロナ感染への対応ができず、人口当たりの死亡率が全国でもダントツになっていること、これが現実です。

それでも選挙になれば「大阪の成長を止めるな」と維新政治の継続を訴える候補が圧勝する、これも現実です。

「大阪の成長を止めるな」の中身はというと、カジノ・万博、リニア新幹線・北陸新幹線の大阪延伸。それで東京やアジアの新興都市との「都市間競争」を生き残るのだと。大阪の未来がそんな空虚で貧相なものでいいはずはありません。そんなものは前世紀末から今世紀初めにヨーロッパやアメリカを覆いつくした新自由主義の 2 - 3 周遅れの模倣です。しかも人々が望んだものではなく、東京からやってきたブレンたちが粗雑に書きなぐったプランです。それでも、そこに希望を託す人たちが、かなり固い支持基盤を構成しています。

恐いのは維新政治の中でこの新自由主義と嫌韓・嫌中国のナショナリズムが矛盾なく共存していることです。先ほどの田中さんのお話で、広島への原爆投下の責任、それを招いた日本の戦争責任、それらを不問にしてきた結果として今日の核の危機、核戦争の危機があるという問題意識が共有されたと思います。維新の会の中心や背後にいる人たちの考え方はそれとは全く真逆です。

大阪だけの問題ではありません。岸田政権の下で日本の政治・経済が戦争モードに突き進もうとしている中で、維新に代表される右派ポピュリズム勢力の存在感が増していることが感じられます。戦後民主主義や平和主義の風化、それを代表してきた組織や政党の衰退、そこでできた空白が右派ポピュリズム勢力の豊饒な土壌になることが危惧されます。

日本だけではなく、G7 に参加するほとんどの国で極右勢力や右派ポピュリズム勢力が台頭しています。それが第二次大戦後、世界に君臨してきた「先進国」、「西側同盟」の現実です。1 つの時代の終わり、そして新しい時代の始まりがなかなか見えない今の時期にこそ、国家や政権ではなく民衆がつながって、新しい時代を語り合うこのような場が必要だと感じています。5 月の行動の成功に向けてともに頑張りましょう。